「内幕もの」の時代と松本清張『日本の黒い霧』

尹　芷汐

一　『日本の黒い霧』、賛否両論のノンフィクション

一九四八年一月二十六日、東京都豊島区の帝国銀行で、ある中年男が厚生省技官と偽り、銀行員ら十六人に毒物を飲ませ、その結果十二人が死亡した。同年八月、画家の平沢貞通が容疑者として逮捕され、一九五五年に死刑を言い渡されたものの、本人は一九八七年に病死するまで無罪を主張し続けた。帝銀事件である。

一九四九年七月五日、国鉄総裁下山定則が失踪し、翌日に死体となって発見された。マスコミがそれぞれ自殺説と他殺説で事件を取材している間に、突然警視庁は自殺説で事件捜査を打ち切った。下山事件である。

一九四九年八月十七日、福島県松川町を通過中だった旅客列車が突然脱線転覆し、乗務員三人が死亡した。同年九月、東芝松川工場労働組合および国鉄労働組合の組合員、計二十名が逮捕され、有罪判決を言い渡されたが、広津和郎をはじめとした作家らの支援運動によって、長年の上訴と裁判が続いた結果、一九六三年九月、被告全員の無罪が最高裁から認められた。松川事件である。

それから、「もく星号墜落事件」「白鳥事件」「伊藤律事件」「昭和電工事件」など、占領期に起きた謎の事件はほかにも多い。一九六〇年の『文芸春秋』に連載された松本清張のノンフィクション作品集『日本の黒い霧』は、そうした未解決事件を再考し、すべての事件においてＧＨＱが真犯人だと指摘したものである。それまでに共産党系メディアによる「噂」として見られていた「ＧＨＱ犯人説」は、松本清張の厖大な論証によってリアリティを持つようになり、「黒い霧」が流行語となるほど、世の中に衝撃を与えた。

『日本の黒い霧』の事件推理については賛否両論がある。大岡昇平が「妥当な判断を下すというよりは、予め日本の黒い霧について意見があり、それに基づいて事実を組み合わせるという風に働いている」[1]と指摘したのに対して、松本清張は連載直後から繰り返して「それぞれの事件を追及してみて、帰納的にそういう結果になった」[2]ことを強調していたが、確かに「GHQの謀略」という先入観が推理に作用していることは否定できない。近年、ゾルゲ事件に関する新たな資料が確認され、渡部富哉による「伊藤律」スパイ説に対する反論[3]が認められ、文藝春秋社も『日本の黒い霧』文庫本の再版にあたって、注を付けて訂正することとなった[4]。一方で、一九六〇年の時代的制限を考慮した上で『日本の黒い霧』の歴史資料としての価値を再評価する藤井忠俊の論文も挙げられる[5]。他に、成田龍一と小森陽一は座談会の形式で、松本清張の「孤立したばらばらのものを追求し、その背後にある何かを探る」[6]歴史探究の方法を評価している。

時代と資料の制限によって、『日本の黒い霧』は必ずしも事件の真相を突き止めたとは言えない。しかし、事件の結論そのものよりも、当時のメディアと世論空間において作品を読み直す時に、『日本の黒い霧』が資料的制限の中でどのような可能性を見せたかこそ、今日に考えるべき問題であろう。本論はその作業を試みるものだが、先に結論を述べておくと、一九五〇年代とりわけ占領期が終結した後に、歴史の「内側」を知りたい気運が高まるのにつれて、「内幕もの」という類型の読み物が盛んに現れ、そうした「内幕もの」は歴史の真実を知る手段になり得ると同時に世論操作の道具にもなり得るもので、『日本の黒い霧』はそうした両義的性格にとらわれない権力批判の可能性を示した、ということになる。

二　「内幕もの」の一九五〇年代

一九五〇年代とりわけ占領期が終結した後、戦争と戦後の経験を綴る「記録」が様々なメディアで繰り広げられていた。杉浦明平が理論的先端に立ち、「記録文学」を試みたのと同時に、労働者の反権力的闘争としてサークル運動が盛んになり、それから安部公房の「壁あつき部屋」をはじめとしたアバンギャルドのドキュメンタリー映画、テレビ普及に伴うテレビ・ドキュメンタリーが制作されていった。鳥羽耕史はこうした記録の歴史をまとめ、記録が盛んになった理由として、

占領軍の方針もあって温存された新聞・ラジオの既存メディアは、大政翼賛から民主化へと一斉に舵を切り替えたが、「大本営発表」を流し続けた戦時下の記憶はまだ遠い昔のことではなかったし、独立後も占領期に培われた自己検閲機能を持ってい

た。朝鮮戦争開戦と同時に発行停止になった『アカハタ』をはじめとする左翼メディアにとって、そうした「ブル新」＝ブルジョア新聞は信用ならざるものだったし、既存メディアにとっての『アカハタ』も共産党の有害なデマゴギーの源だった。一九四九年に続発した下山・三鷹・松川事件などの怪事件について、でっち上げ（フレームアップ）の可能性が論じられる中、一般に報道された情報ではない真実を知りたいという気運が醸成されていたのも確かである[7]

と論じている。それから、佐藤泉も当時のドキュメンタリーについて、

五〇年代が終わると文壇は純文学論争に沸騰するが、このとき純文学／大衆文学、芸術／娯楽という表面の争点の下で起っていたのは、従来のリアリズム理念に対し無効性を突きつけるような新たなリアリティの生成だった[8]

というように、リアリズムの変容の問題として捉えている。ともかく、記録文学は、一九五〇年代の報道体制に対する不信の中で、作家・労働者・サークルの反権力的闘争の手段として生まれたことについては、以上の先行論で十分に説明されたと思われる。

しかし、同じ時代に「内幕もの」というジャンルのルポルタージュがジャーナリズムの中で急激に拡大していたことも看過できない。「内幕もの」は、アメリカ人ジャーナリストのジョン・ガンサーの“inside books”から誕生した言葉である。ガンサーは、一九三〇年代からヨーロッパやアジア各国を周遊しながら取材し、各地域の政治・社会・経済情勢および文化をめぐるあらゆる情報を提供していた。その著書『欧州の内幕』[9]『亜細亜の内幕』[10]『中南米の内幕』[11]『アメリカの内幕』[12]『ソ連勢力圏の内幕』[13]『マッカーサーの謎』[14]などにおいて、数々の出来事が「inside＝内幕」として書かれている[15]。これらの著書はすべて日本で翻訳出版されたが、その中でも最も著名なのは、朝鮮戦争の時期に日本に滞在したガンサーが、GHQの日本改造の事業とりわけマッカーサーの功績やその身辺の出来事を詳細に記録した『マッカーサーの謎』である。当時、簡単に知ることのできないGHQの内部情報およびマッカーサーの私生活について、ガンサーがいとも簡単に情報を入手できたため、日本の読者はかえってガンサーから自国の占領事情を教わらなければならなかった。

単行本で刊行された「内幕もの」としては、ガンサーの著書以外では、マーク・ゲイン『ニッポン日記』（筑摩書房、一九五一年）、I・F・ストーン『秘史朝鮮戦争』（新評論社、一九五二年）、辻政信『潜行三千里』（毎日新聞社、一九五〇年）、篠原正瑛訳『僕らは

ごめんだ――東西ドイツ青年からの手紙』（光文社、一九五二年）などもよく知られているが、書かれる対象は主に第二次大戦中の日本軍、朝鮮戦争、米ソ関係、占領下の日本、といったものになっている。

それから、「内幕もの」は総合雑誌や週刊誌などの報道メディアにおいても主役的な存在だった。雑誌の場合、例えば『日本の黒い霧』の掲載誌『文藝春秋』を見ると、

ガンサー　「占領下日本の内幕」一九五一年六月
K・ビーチ　「日本に君臨したマッカーサー――神の如く崇められたマッカーサーの内幕」一九五五年三月
高木健夫　「日本警察罪悪史――國民を恐怖のどん底にたたきこんだ警察暴力の血に塗れた歴史の實態を鋭く抉る」一九五四年五月
河合信太郎　「疑獄の幕は下ろされた――一代の鬼検事が綴る秘められた汚職ノート」一九五四年十一月
林三郎　「「幻の精鋭・関東軍」特集」一九五六年九月

のようなタイトルは常に目立った場所に配置されている。「内幕」「歴史の実態」「疑獄」「汚職」「幻」など、「秘密の暴露」をほのめかすキーワードが、謎めいた歴史に対する読者の好奇心をくすぐると同時に、情報提供者が歴史的出来事の内側に立った人物だと示し、記事の信憑性を高めているという印象を受ける。「幻の精鋭・関東軍」において、戦時中、高級将校であった林三郎による発言は、関東軍の外側にいた人間よりも権威を持つわけである。記録対象も、「マッカーサー」「鬼検事」「関東軍」のように、権力者としてのイメージが強ければ強いほど、読者の好奇心をそそる効果がある。

一九五三年八月の『出版ニュース』に、「書評委員会」による特集「内幕ものの意図するもの」（一九五三年八月中旬号、二～六頁）が掲載され、「内幕もの」の流行した状況が紹介された。書評委員会は、「内幕もの」を「自由抑圧の産物」と見なし、「内幕ものが盛んに出ればでるほど、自由がなかったことを示している」（二頁）と記している。なぜなら、「内幕」は事実が発生した時期を外して発表されるものであるからだ。また、「秘密の中から無数の宣伝文書が内幕ものとして出てくる」ことも指摘された。

それは、何らかの目的で、すべての情報ではなく一部の情報を選択的に暴露したものが多いためである。例えば、ガンサーの著作はほとんどアメリカの正義と民主を謳歌するものであり、元陸軍大佐・辻政信の『潜行三千里』は「内幕もの」の仮面をかぶった自己弁護にすぎない。一方で、マーク・ゲイン『ニッポン日記』はGHQが天皇を日本民主化作戦のために温存して活用する策略を冷徹に指摘し、『僕らはごめんだ』は原爆の中に隠れたアメリカの人種差

別を激しく批判したものとして、後に関川英雄の映画『ひろしま』（日教組、一九五三年）にも使用された。このように、「内幕もの」は様々であり、好奇心をくすぐる言葉におどらされず、慎重かつ批判的に読む姿勢も求められるのである。

そこで、「内幕」を書くものの位置が重要である。そもそも、「内幕」という言葉は、政治的出来事を主導する権力側の内側に隠れた秘密という意味として理解できる。「内幕もの」の元祖であるジョン・ガンサーも、精力的に現地取材をし、政治家の権力層の内側に入り込み、内側の出来事を外側の読者に伝えたわけである。したがって、外側にいる読者は語る主体性を持たないわけで、語られた内側の情報に嘘があるかないか、誰が判断できるだろう。そうした語りの権力性に対して、『日本の黒い霧』は外側の視点から内側を語るモデルを提示したのである。

三　松本清張、「一市民」から見た「内側」

『日本の黒い霧』を論じる前に、松本清張が外側からの権力批判を試みるきっかけを得たと思われる作品、小説「黒地の絵」（『新潮』一九五八年三・四月）に触れてみたい。一九五〇年七月十日、朝鮮戦争へ向かうために多くの黒人兵が小倉のジョウノ・キャンプに送られたが、その中から百十数名が脱走し、多数の民家に押し入り暴行を加える、という事件が起きた。しかし、MPの情報規制によって、賠償はもちろんなく、事件の実態もほとんど隠された。当時の朝日新聞の社員で北九州に住む一市民だった清張は、後に作家として上京してから、事件が北九州以外で報道されなかったことに驚き、世間に事件を知らせるために「黒地の絵」を執筆した。小説「黒地の絵」は、それらの黒人兵が朝鮮に送られた後、暴行の被害者留吉が米軍キャンプの死体処理所の作業員として雇われる、という設定となっている。朝鮮の戦場から搬送されてきた死体を扱う日々の中で、留吉はある日、黒人兵の死体に見覚えのある刺青を発見し、その死体がかつて自分の妻を強姦した人のものであると気付き、ナイフで刺して復讐するのである。

小説は、主人公「留吉」と死体処理所の外科医、また「小倉の空間にいた誰か」という位置に立つ語り手、この三者のいずれかの視点から出来事を見るようになっており、ラジオから朝鮮の戦況を聞き、町の風景を眺め、米軍の死体を通して戦争の様子を想像する彼らの日常を綴る。例えば、「語り手」はラジオ放送から「従業員募集」が聞こえなくなったことから、キャンプの内側で「死体処理業が長期化、定時化した」ことを推測している。このように外側にいながら内側からの情報の裏を読む方法によって、「黒地の絵」の事件の語りが成り立った。

「黒地の絵」の叙述に有効性を見出したからか、松本清張はその

直後に同じ方法を用いて、「記者」の視点から「帝銀事件」を推理し、「小説帝銀事件」も書いた。そしてやがて松本清張は虚構の視点人物すらなくし、作家自らの視点から事件の「内側」を推理する方法で、『日本の黒い霧』を執筆するに至った。

『日本の黒い霧』の第一作「下山総裁謀殺論」は、本論最初に言及した「下山事件」を題材として書かれたものである。下山事件は当初、自殺説と他殺説両方の線で捜査が行われていたが、様々な疑問点が明白にならないまま、突然「自殺」と結論づけられて、捜査が打ち切られた。

事件直後、井上靖も「黯い潮」(『文藝春秋』一九五〇年七月〜九月)で、「自殺説」をとる毎日新聞と「他殺説」をとる朝日新聞の報道戦をモチーフにして小説を書いたが、「自殺説」の勝利を迎えたところで作品が終結し、事件そのものの追求に深入りしなかった。

当時、『改造』と『文藝春秋』が同時に警視庁の特別捜査本部から『下山白書』を「スクープ」して公開したが[16]、松本清張は二つの雑誌が同時にそれをスクープしたという妙な偶然に注目し、おそらく捜査資料が「内側」から意図的に流されたものだと推測した上で、突然「自殺」の結論になったことの「不自然さ」に注目し、他殺論の方向で改めて事件を分析した。

下山総裁のシャツから検出された緑の粉について、松本清張は「占領当時、外国の兵器を見た人は、その色が濁った暗いグリーン色だったことを思い出すだろう」[17]というように、占領軍が殺害の過程に関与していると大胆に推測する。推測にすぎないが、このような細部の推理が重なっていくと、占領軍の事件への関与が次々と浮き彫りになってくる。もちろん、事件の真相は未だにはっきりしないため、本論も松本清張の推理に安易に同意することを避けたい。それより重要なのは、松本清張が新たな資料を入手するわけではなく、「記事の「歪曲」が、かえって真の姿を伝える場合も多いのだ」[18]と述べたように、ほとんど『下山白書』と当時の新聞報道の読み込みだけで事件を解明しようとした手法である。例えば、

> 三越に消えてからでも五反野付近に現れるまで数々の目撃者の供述を取っているが、そのいずれも下山総裁の洋服の色、ワイシャツの色、ネクタイの模様、靴の色などが一糸乱れず正確に指摘されている。〔中略〕人間の眼が当てにならないことはこれまでしばしば言われており、実験の結果も報告されている。服がネズミの色であり、ネクタイが紺色に金糸が入っているなどと細かな観察を事件以降相当な日数を経ても言い得るというのは驚歎すべき事実である[19]

と指摘している。他の者が目を付けない細部の数々が、松本清張の「外側」から「内側」を見破る鍵となった。そして『下山白書』に

おいての最大の矛盾は、当初の「他殺説」から理由なく突然「自殺説」になった点であり、松本清張はこの点に注目して、「捜査一課と二課の裏にあるGSとG2の対立」を見出した。反共産主義を中心とする参謀第二部G2と、日本国内の民主改革に重心を置く民政局GSとの占領方針の違いが、直接捜査一課と捜査二課に反映され、そして、そもそも裏で事件を操作したG2を隠蔽するために、情報規制が警視庁にかかり、捜査一課の自殺説で事件がいち早く収束されたという。

松本清張の主張は、事件の十年後だとはいえ、世の中に大きな衝撃を与えた。例えば、後に手塚治虫が下山事件をモデルにして創作したマンガ『奇子』[20]も他殺事件だと設定し、GHQスパイとなった主人公を下山事件の共犯者として登場させた。同作品に、「替え玉説」や、シャグノン中佐が下山総裁に「国有鉄道はおれの権利だ」と怒鳴る場面など、「下山総裁謀殺論」と共通している箇所はほかにも多い。

『日本の黒い霧』の作品は、いずれも「下山総裁国鉄謀殺論」と同じように、内側に潜り込むのでもなく、当事者に語らせるのでもなく、公表された既存資料の精読だけをたよりにして事件を語り直した。このような外側からの語りは、単に事件に対する野次馬根性を満足させるものではなく、同時代のメディアと世論操作に対する批判の可能性を示すものであると考えたい。そのために、一九五〇年代のメディアと世論との関係性を想起する必要があるだろう。

四　「内幕もの」と世論

まず、一九五〇年代は、メディアにおける検閲が世論操作へと転換した時代であることを確認しておきたい。戦前の日本では、最初は伏字つまりタブーに触れる文章が意味のない記号に変えられる形の検閲が存在したが、一九三九年以降にはそうした文章自体が消される形の検閲へと変化した。それに対して、占領期の前半はGHQに不利な報道が検閲で書き換えられていたが、一九四九年十月に検閲が禁止されると同時に、各新聞社において輿論調査室が成立し、一九四八年一月に日本世論調査会も発足した[21]。それは、言論の自由が保障されたというよりも、見える形の検閲が民間情報教育局CIEの指導の下で不透明化したと見た方が適切である。佐藤卓巳がこの時期について、論理と多数決に基づく「輿論」が、感情と空気に基づく「世論」にすり替えられていく時期だと指摘し、「公然たる戦前型検閲よりも密やかな戦後型世論操作」の方が警戒されるべきだと主張した[22]のも、見えにくい言論の管理はむしろ検閲よりも危険であると気付いたからであろう。

一九五〇年代、検閲制度が廃止になった直後だからこそ、それまでに秘密とされた物事に対する興味が増長し、ジョン・ガンサーの

著書をはじめとした「内幕もの」が人気を集めたと考えられる。しかし、多くの「内幕もの」は、秘められた歴史を暴露するように見せかけて、世論操作に都合のよい道具として利用されてしまう。それは、語り手が権力機関の内側にいるか、語る対象の当事者である場合が多く、各自の利益のために、選択的にしか情報を示さず、不利をもたらす秘密を隠すこともあるからだ。にもかかわらず、「内幕」の「暴露」に見えるような言葉のレトリックによって、あたかも言論が自由で、情報を知る平等が保障されたように見えてしまう。

ジョン・ガンサー「内幕もの」の数々は、本当に真実の暴露を目的としていたのだろうか。ＧＨＱの「内幕」を暴露する『マッカーサーの謎』は、いくら言葉を巧みに用いて語り手の中立性を強調しようとしても、結局日本における「民主改革」の正当性を主張するイデオロギーでしかない。ガンサーは、マッカーサーという人物がいかに「勇気」と「自我」、「義務観念」を持つ者か、いかに「からだ全体が知恵の塊であることか」[23]を描くのに力を惜しまないし、ＧＨＱが日本で実施した諸改革が「長い期間にわたって、じゅうぶんに効果をあげ、また、国民のあいだに根をおろして、これによって、日本の共産主義化を防ぐことができるかどうか」[24]という記述からも既に冷戦的イデオロギーが全面的に押し出されている。

さらに、『マッカーサーの謎』は朝鮮戦争の正当性を主張するために書かれたものでもあるといえる。この本の最も肝心な内容は、朝鮮戦争の勃発する前後を記述した箇所であるが、当時日本に滞在し、ＧＨＱの上層部の社交活動にも熱心に参加していたガンサーは、朝鮮戦争が起きた朝に、一緒に日光旅行を予定していたホイットニーが突然司令部に呼ばれたことや、日光旅行中に、突然北朝鮮が攻撃を開始したという電話があったことを記録し、ＧＨＱにとって朝鮮戦争はまったく予想外であったと証言している。その朝、「東京の総司令部はいわずもがな、韓国側も、韓国駐在のアメリカ人たちも、完全に不意を衝かれたかたちであった」と、ガンサーは語る。[25]

ＧＨＱの内側を知り尽くしたガンサーによる情報のため、こうした語りも高い「信憑性」を持つものとして捉えられたわけである。『マッカーサーの謎』の日本語訳のあとがきにある、「東京でガンサー氏は、まずＶＩＰという特別の待遇をうけたうえ、総司令部当局からあらゆる便宜が提供されたようだ」、「東京でのガンサーは、まさに文字通り鬼に金棒だったのである」[26]と評している文章も、ガンサーの権威性を証明できる。そのように権威を得たガンサーのルポルタージュは、ＡＰ／ロイター／共同通信が朝鮮半島から発信したニュースと示し合わせたかのように、日本における朝鮮戦争のイメージを「北朝鮮の不意討ち」として作り上げ、朝鮮戦争におけるアメリカの正当性、および日本からの協力の正当性を読者に訴えかけて世論を導いた。

そうした世論の方向に疑問を示したのはもう一人のアメリカ人

ジャーナリスト、I・F・ストーンだった。ストーンは「南鮮には五百名の米軍少将と七百名の文官専門家がおり、政府と軍の全体にわたってひろくちらばっていた」のに、「境界線で、侵略的な部隊が軍事活動の準備をしているのを見つからずにすむとは信じられない」と、朝鮮戦争の「不意討ち」説を否定した上で、朝鮮戦争をめぐる報道を『ニューヨーク・タイムズ』や『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』などから分析し、朝鮮戦争直前の「京城」と「司令部」の意味深い「沈黙」に注目し、朝鮮戦争の勃発をめぐる南北両方の「お膳立て」を指摘した[27]。

『秘史朝鮮戦争』は日本で翻訳されてから、「彼は分析の資料として彼が糾弾する側の発表だけを材料に使います。これは一種のフェア・プレイの精神である[28]」、「公式の見解に反旗を翻した本。歴史というものがどんな風につくられるかということを知るにも面白い本だ[29]」と絶賛された。新たな資料を使わず、公的報道の矛盾を通して真相を追求する点も、松本清張の『日本の黒い霧』にヒントを与えたと考えられる。『日本の黒い霧』の最終章「謀略の遠近図」において、松本清張は直接『秘史朝鮮戦争』を引用しながら、朝鮮戦争が勃発する前に「境界線に沿って千回もの小戦闘が起っていた」ことから、韓国とGHQ側も戦争の用意をしていたと推論し、「率直に云えば、三十八度線をどちらが先に越したかということは、時間の問題のように思う」と結論づけた[30]。

では、松本清張が単にストーンの論説を借用しただけかといえば、そうではない。ストーンはあくまでも戦場に焦点をしぼり、朝鮮戦争と日本との関係を言及することに重心を置いていなかった。そのためか、『秘史朝鮮戦争』の日本の読者に対する影響も限られている。しかし、松本清張の「謀略の遠近図」は、朝鮮戦争における連合軍側の謀略に切り込んだだけではなく、日本が朝鮮戦争のために「反共の防波堤」になったことや、日本人がいかに戦場内外で朝鮮戦争に参加したかということをほのめかした。とりわけ、戦後も七三一部隊がGHQの支持の下で生き残り、朝鮮での細菌戦のために研究を続けていたことが衝撃的な「内幕」として書かれている。松本清張が『日本の黒い霧』に書かれたほとんどの事件は最終的に朝鮮戦争につながると述べたように、この作品のほとんどの事件の語りはGHQ批判を目指すものである以上に、朝鮮戦争に対する日本の主体性を明らかにしようとするものだった[31]。それが権力層の外側から見た占領期の日本の「内幕」である。

ただ、繰り返すようだが、本論は朝鮮戦争およびそれに関わる日本の「内幕」に対する松本清張の説自体に賛同するのが目的ではなく、その中で事件報道の裏を読む姿勢と、世論操作に対する抵抗を見出して、その方法の同時代的可能性を評価したい。歴史的事実と思い込んでいるものは都合のよい作り物になっていないか、という疑問を持つことの重要性を提示し、また、真実を知るために新たな

「機密資料」を掘り起こすだけではなく、まず既存の資料を精読するという方法の有効性を提供したものとして、『日本の黒い霧』は評価されるべきである。

ではなぜ朝鮮戦争が休戦して六年半も経った一九六〇年に、『日本の黒い霧』で事件を掘り起こす必要があったのか。一九六〇年、新日米安保条約を締結するかしないかという大きな節目を迎え、大規模な闘争が起ろうとしている中で、松本清張は安保反対の声にシンパシーを示しながら、「小説帝銀事件」から『日本の黒い霧』まで、あくまでGHQといった歴史的存在を細部から想起させることを通して、安保体制によってどのように汚職・不正・犯罪が隠蔽され、どのように日本が戦争に巻き込まれるのかを資料の面から提示した。杉浦明平が「体制を批判してその骨髄までメスを刺しこむけれど、これを打倒しようとしているわけではない[32]」とコメントしたように、松本清張は闘争の空気に流されることを避け、読者に権力体制そのものを認識させることをひとまずの目的としたのかもしれない。

しかし、その延長線上で興味深いことが起きる。一九六三年に自衛隊統合幕僚会議が「第二次朝鮮戦争」を想定して、机上作戦演習「三矢作戦」を極秘に行ったが、その作戦は一九六五年二月十日の衆議院予算委員会で、社会党の岡田春夫に指摘され、一般に知られることとなった。岡田春夫の証言によると、当時「三矢作戦」の資料を提供したのは松本清張だったとわかった[33]。日本の再軍備化を懸念した松本清張が、予算の面から再軍備化を阻止しようと、岡田春夫に資料を提供したという。資料上の権力批判は、やがて権力の抑制につながるということを証明する例である。

五　ノンフィクションという矛盾

これまでに『日本の黒い霧』あるいは松本清張の「ノンフィクション」が同時代においてある種の権力批判の可能性を示したと評価してきたが、一方でその限界にも気付かなければならないことを最後に指摘しておきたい。「小説帝銀事件」以降、松本清張は、「なまじっかフィクションを入れることによって客観的な事実が混同され、真実が弱められるのである[34]」と述べ、『日本の黒い霧』においてフィクションの要素を取り除こうとした。しかし、断片的資料から事件を推理するには、必ず想像力を働かせねばならない。例えば「下山総裁謀殺論」の中で、「なぜ下山総裁が三越に入って消えてしまった」のかという肝心な問題について、松本清張は「情報好きだった下山総裁」が情報提供の男に誘われ、様々な場所に行くように振り回されたと推測した。資料的左証がないため、この一節では「だと思える」「直感では」「に違いない」「ではあるまいか」といった言葉が頻繁に使用され、資料の空白は想像と創作で補わねばなら

なかった。つまり、『日本の黒い霧』の「ノンフィクション」は、テクスト自体によって否定されたともいえる。

こうした「ノンフィクション」の方法の問題については、南富鎮が「近代の歴史学や法学がもとよりフィクションとノンフィクションという曖昧な境界のうえに存在していたがゆえである」と指摘し、「清張が提示したこうした側面は、ノンフィクションを装うきわめて幅広い近代学問領域の本質的構造と深刻な倫理の問題として今なお残されている」と述べている。[35]

筆者の考えでは、それは松本清張の「作家としての欲望」によるものでもある。「情報屋の罠」という創作で下山事件を解明しないと、「下山総裁謀殺論」に謎が残され、作品も完結しないストーリーになってしまう。「作家」として『日本の黒い霧』を書き、読者も「作家松本清張」の作品を読んでいる以上、松本清張は雑誌記事のみを書くジャーナリストになりきれず、完成したストーリーを書くことを捨て切れない、強いていえば「作家」を捨て切れないのである。「内幕もの」が読みたいと読者を駆り立てるのは、歴史事件に対する欲望でもあることは、週刊誌から新聞、中間小説誌まで様々なメディアに作品を書いている松本清張は、よく知っているはずである。

そのためか、『日本の黒い霧』の続編である『深層海流』は、小説として書かれた。主人公中久保京介は、財界の大物である板根重武を補佐したことがきっかけで、「総理庁特別調査室」が設立され、秘密に諜報機関としての機能を果たそうとしていることに気付く。調べていくと、その設立の裏に「マーカット資金」[36]が流動しているということが次第に判明する。内容から見ると『日本の黒い霧』の続編といってもよいが、主人公が出来事を成し遂げるという小説の形式、および会話による物語の進行によって、『日本の黒い霧』より明確なストーリーが出来上がり、事件の説明もわかりやすくなっている。しかし、小説として書かれ、小説として読まれている以上、『深層海流』の事実性を訴える力は『日本の黒い霧』より当然弱まってしまった。それ以降も、松本清張の創作は常に小説と「ノンフィクション」の間で揺れ動いていた。どこに焦点を当てるかについて、作家自身も創作の中で探索し続けていたのであろう。

注

(1) 大岡昇平「松本清張批判――常識的文学論⑫」『群像』一九六一年十二月、一九一頁。

(2) 松本清張「なぜ「日本の黒い霧」を書いたか――あとがきに代えて」『松本清張全集30』文藝春秋社、一九七二年十一月、四一八頁。

(3) 渡部富哉『偽りの烙印――伊藤律・スパイ説の崩壊』五月書房、一九九三年六月。

(4) 「伊藤律スパイ説修正」『東京新聞』二〇一三年五月二十八日夕刊。

(5) 藤井忠俊『日本の「黒い霧」は晴れたか』窓社、二〇〇六年二月。
(6) 成田龍一・小森陽一対談「松本清張と歴史への欲望」『現代思想』二〇〇五年三月、七三頁。
(7) 鳥羽耕史『一九五〇年代――「記録」の時代』河出ブックス、二〇一〇年十二月、九～一〇頁。
(8) 佐藤泉「五〇年代ドキュメンタリー運動――生活を綴る」『昭和文学研究』二〇〇二年三月、一三頁。
(9) John Gunther. *Inside Europe*. New York and London, Harper & Brothers, 1938. 日本語訳は一九三九年に今日の問題社により出版された。
(10) John Gunther. *Inside Asia*. New York, Harper & Brothers, 1939. 日本語訳は一九三九年に今日の問題社により出版された。
(11) John Gunther. *Inside Latin America*. New York and London, Harper & Brothers, 1940. 日本語訳は一九四二年大日本出版社により出版された。
(12) John Gunther. *Inside U.S.A.* New York and London, Harper & Brothers, 1947. 日本語訳は一九五〇年に読売新聞社により出版された。
(13) John Gunther. *Behind the Curtain*. New York, Harper & Brothers, 1949. 日本語訳は一九五〇年時事通信社により出版された。
(14) John Gunther. *The Riddle of MacArthur*. New York, Harper & Brothers, 1951. 日本語訳は一九五一年五月に時事通信社により出版された。
(15) 「内幕」を題名にする日本の書籍は明治時代から既にあった。しかし、大量の「内幕」を書く書籍・記事が現れるのは、ガンサーの著作が日本（および中国・ヨーロッパなど、多くの国）で翻訳されてからである。本論が「内幕もの」で指すのはそうした読物である。
(16) 松本清張「下山事件捜査最終報告書」『文藝春秋』一九五〇年二月、一二七～一五七頁。「下山白書」『改造』一九五〇年二月、一五四～一七五頁、三月、一〇四～一二三頁。
(17) 松本清張「日本の黒い霧――下山総裁謀殺論」『文藝春秋』一九六〇年一月、一六〇頁。
(18) 松本清張「なぜ「日本の黒い霧」を書いたか」、四二二頁。
(19) 松本清張「日本の黒い霧――下山総裁謀殺論」、一四四頁。
(20) 手塚治虫『奇子』小学館ビッグコミック、一九七二～一九七三年。
(21) 一九四六年十一月に当用漢字表の更新によって「輿」の使用が制限され、「世」と表示されるようになった。佐藤卓巳は、明治以来、違うニュアンスで使われた「輿論」（public opinion）と「世論」（popular sentiments）は、それにより混乱するようになってしまったと指摘した。佐藤卓巳『輿論と世論――日本的民意の系譜学』新潮社、二〇〇八年九月、八二頁。
(22) 佐藤卓巳『輿論と世論』。
(23) 『マッカーサーの謎』、四九頁。
(24) 『マッカーサーの謎』、一八八頁。
(25) 『マッカーサーの謎』、二五七～二五八頁。
(26) 木下秀夫・安保長春「あとがき」『マッカーサーの謎』、三六六頁。
(27) I. F. Stone. *The Hidden History of Korean War*. New York, Monthly Review Press, 1952. 日本語訳『秘史朝鮮戦争』は一九五二年九月に新評論社により出版された。引用した箇所は上巻五頁。
(28) 中村光夫「I・F・ストーン著『秘史朝鮮戦争』」『中央公論』一九五三年一月、一六二頁。
(29) 大山正「秘史朝鮮戦争――朝鮮戦争のもう一つの歴史」『出版ニュース』一九五二年十月、一〇頁。
(30) 松本清張「日本の黒い霧――謀略の遠近図」『文藝春秋』一九六〇年十二月、一八五頁。
(31) 「黒地の絵」も朝鮮戦争をめぐる日本の主体性をほのめかす作品であるということが、坪井秀人によって指摘されている。坪井秀人「朝鮮戦争・ベトナム戦争の時代――冷戦と経済成長の中で」『コレクション　戦争と文学別巻〈戦争と文学〉案内』集英社、二〇一三年九月、一〇四頁。

(32) 杉浦明平「解説」『松本清張全集30　日本の黒い霧』文藝春秋社、一九七二年十一月、五二三頁。

(33) 「防衛庁「三矢作戦」の追求――松本清張氏から資料」『朝日新聞』一九八七年一月二十八日朝刊。

(34) 松本清張「なぜ「日本の黒い霧」を書いたか」、四二〇頁。

(35) 南富鎮「法と歴史と真実というフィクション――松本清張「日光中宮祠事件」『小説帝銀事件』『黒い福音』を視座にして」『翻訳の文化／文化の翻訳』第九号、二〇一三年三月、二三頁。

(36) マーカット資金とは、戦時中に軍資金として収集された大量の重金属で、戦後、日銀の地下から密かに持ち出されて、GHQの秘密事業などに運用されたと噂されている資金のことである。「M資金」ともいう。『日本の黒い霧』の「謀略疑獄」と「征服者ダイヤモンド」という二章にも、GHQと日本の官僚組織との間に「M資金」をめぐるやりとりがあったと書かれている。「半分はアメリカ軍に押収のかたちで略奪され、残りの大半も日本の政治面に隠匿された疑いが濃いのである。アメリカ側に押収されたものは、その幾分かは彼ら将校によって持出されてはいたが、大部分は何々資産という名において現在の謀略資金となり、これがヤミ市場の顔役とつながっている」と松本清張は述べている。

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費　課題番号12J03596）による研究成果の一部である。